

中国演劇資料の収集とデジタル・アーカイブ化

三須祐介（立命館大学 文学部 教授）

E-mail sanxu@fc.ritsumei.ac.jp

1. はじめに

筆者は、20 世紀前半すなわち新中国建国前までの、中国とりわけ上海地域の地方劇（滬劇）について研究を続けてきた。その過程で、少なくない演劇上演資料も収集してきた。

滬劇などの地方劇は、中国語では京劇と同様に「戯曲 xiqu」の категорияに含まれる。歌唱に重きを置いた伝統的な形式を踏襲しつつ、土着の方言と固有の節回しを基礎にした演劇形態であり、通常、上演の範囲は限られ、ローカル性の高い演劇である。

滬劇は、上海郊外の農村地域に分布していた固有の節回しを基にした語り物芸能に起源を持ち、20 世紀になって徐々に上海の市中に進出し、演劇としての体裁を整えていった。20 世紀初頭の上海は、演劇では京劇が席卷しつつあったが、その後、台詞を中心とした近代劇や、新興メディアの映画も徐々に存在感を増すようになっていく。そのような時代において、新興の小さな地方劇である滬劇が生存していくことは容易なことではなかった。そのため、大きな劇種や新興メディアに対抗するのではなく、与えられた歴史的条件下をむしろ自らの切磋琢磨のために利用しながら生存空間を維持していたのである。たとえば、ある映画作品を観に行き、そのままそれを舞台に載せるというような、商機を優先した粗製乱造の実践も躊躇なく行っていた。また、上演場所も、20 世紀の前半に上海などの大都市に少なからず登場した遊楽場（遊戯場とも称す）などに頼ることも多く、そのなかで他劇種との交流や競争も頻繁に行われた。1949 年の新中国建国以降は、その他の劇種とともに、政府の文芸政策によって管理されていくようになる。

筆者は 1990 年代半ばの上海留学を経て、その後も定期的に上海での資料調査を継続してきたが、その過程で、「戯単」や「説明書」と呼ばれる演劇上演資料の収集も行ってきた。これらは、いわゆる舞台作品の上演パンフレットのようなもので、好事家のコレクションとして私蔵されない限り、図書館や博物館で整理所蔵されることはほぼ期待できない、いわゆる「エフェメラ」である。そのため、古物や旧書の市場で見かけることがある程度のものだった。たとえば、かつて古物商が立

ち並んでいた東台路や、城隍廟のエリアにある個人の古物商の集まったビルの地下フロア、市内に数店舗を擁する上海旧書店でも、ほとんど目にしたことはない。

2000 年代以降、福州路にある上海古籍書店の入るビルの 3 階が、個人の古書商が集まるフロアとなった（現在はすでになくなっている）。ここでは、古書や古玩に混じって「戯単」が売られていることもあった。そこで上海に調査に入る度に機会を見つけては少しずつそれら「戯単」を購入するようになったのである。当時は、商品価値がそれほどないものと見なされていたようで二束三文のような価格であったが、研究者などが注目するようになっていったからか、徐々に価格が上昇していくようになった。コロナ禍前の上海では既に「戯単」を売るような個人の商店はほとんど見られなくなったが、「孔夫子旧书网」¹⁾のような古書販売サイトがそれらを糾合していったとみられ、このサイトで売られている「戯単」類は少なくない。なお、収集できた戯単類は、基本的には新中国建国（1949 年）以降のものが主であり、それ以前の民国期のものはほとんどない。

本稿では、国内外の「戯単」研究や関連するデータベースを概観した上で、筆者が進めている「戯単」アーカイブの状況を紹介していく。

2. 「戯単」研究の状況

2-1. 近代中国演劇研究とエフェメラ

近代中国（民国期）、とりわけ近代化の先端にあった上海における重層的なメディア空間は「伝統劇」にも密接に関わり、舞台上演とその外側、すなわち新聞、雑誌、レコード、ラジオなどを横断する演劇的空間をつくりあげていた。舞台上演は、ある時空間における一回限りのものであり、それを再現することは不可能に近い。そのような困難を有する近代中国演劇研究においては、次のような材料（資料）を組み合わせることでいくことが重要である。

① 劇評

当時の上海の主要な日刊紙であった『申報』や『新聞報』の他、娯楽や芸能、あるいは特定の劇種に特化した小型タブロイド紙、また雑誌（定期刊行物）などには劇評や紹介の類が掲載されていた。ただ、20 世紀

の初頭にすでに大きな影響力のあった京劇のような大きな劇種に関するものが主であり、筆者が研究対象とする滬劇のような新興の地方劇についての言及は限定的であった。当時は夥しい種類の小型タブロイド紙が刊行され、滬劇に関わるものとしては、たとえば『申曲日報』(1941—1943)があるが、申曲(滬劇)上演を供給する側(劇団)、受容する側(ファン)との距離が近く、クリティカルな内容が担保されていたかは一考の余地がある。

②上演広告

上述の新聞などには、上演広告も掲載されていることが多い。これらの情報をたどることで、実際の上演について日時や場所(劇場)を探っていくことも重要であるが、広告であるため、実際にその通り上演されたかは確認しにくい。

③戯単(上演パンフレット=エフェメラ)

上演パンフレットである「戯単」には実際の上演についてのさまざまな情報が掲載されており、演劇研究における重要性は高い。一方で、同演目上演の際の使いまわしもあったと見られ、上演の日時や場所を同定しにくい場合もある。

④档案

档案とはいわゆる公文書のことであり、一般に出回るものではないが、各地の档案馆には、劇団や劇場経営についてなどの文書が保管されている場合もある。

もちろん、これらの他にも役者を始めとする関係者や観客による記録(回顧録や観劇記)なども重要であるが、いずれにせよ上演の実態に近づくには、多角的に複数の材料を集め、外堀を埋めるようにしてゆくしかない。また、上述の4点はデータベースという視点から、研究を推進する重要なポイントであることは言を俟たない。

現時点において、上述の4点のうち、上演広告、戯単(広義の演劇資料含む)についての注目すべきアーカイブ化についての状況を、上海地域を中心に紹介したい。

まず、上演広告については、姜進主編『二十世紀上海報刊娛樂版廣告資料長編 1907-1966』²⁾を紹介したい。これは、1907年から1966年までの新聞における娛樂面の広告をテキストデータ化したものである。非常に膨大な作業量であったことは想像に難くないが、その量の膨大さゆえであろう、年毎の抽出量は限定的である。たとえば1949年から1959年まで取り上げている『新聞日報』、1960年から1966年までを取り上げている『解放日報』では、一年でおおよそ6日間分の抽出にとどまっており、概況は把握できるものの具体的な日に絞った調査は不可能である。また、テキストデータ化し

ているため、転記ミスなどが含まれている可能性も否めない。しかし、20世紀の新中国建国前後をまたぐ上海地域に限った舞台芸能や映画といった娛樂の概況を知る上で、有用な資料集であることは間違いない。

次に、戯単については、上海市文化藝術档案馆編『上海舞台藝術説明書集錦珍藏版(1949-2005)』³⁾を紹介したい。これは上海市文化藝術档案馆が所蔵している戯単(説明書)をまとめたものである。第一巻(1949-1964年)は、劇種ごと、さらには音楽、舞踊、雑技といった項目も立てられている。第二巻(1965-1984年)と第三巻(1985-2005年)は、上海を代表する劇団(たとえば上海京劇院、上海滬劇院など)ごとに戯単をまとめている。紙版の資料集の体裁ではあるが、全頁カラー印刷であることは特筆しておく。ただ、問題は基本的に表紙部分のみの掲載になっている点である。メタデータも、演目名と上演年(月)のみであり、戯単の具体的な内容についてはほぼ触れられていない。また、エフェメラの特性上、必ずしもすべての戯単が網羅されているわけではないことにも注意が必要である。もちろん、新中国建国後、半世紀に及ぶ上海地域の舞台藝術の変遷をエフェメラである戯単でたどることができる書籍の刊行は非常に有意義である。

2-2. 日本における中国演劇関連のデータベース

中国演劇や芸能文化に関わるデジタル・アーカイブは日本にもいくつかある。たとえば早稲田大学文化資源データベースに「中国芝居番付データベース」⁴⁾があり、1920年代から30年代の天津のものが中心で、戯単は49点ある。上海のものも1件(天蟾舞台)含む。同大学古典籍総合データベースにおける「中国の民間信仰と庶民文芸」⁵⁾は、澤田瑞穂氏の風陵文庫を基にしたデータが収められている。ただし、宝巻や俗曲といった口唱文芸や年画などの民俗資料が主で、戯単は収蔵されていない。

東洋文庫にも中国祭祀演劇関係の画像や動画が収められており、注目に値する。田仲一成氏が1980年代以降に祭祀演劇を撮影した画像や動画が中心で、商業演劇とは異なる民俗芸能の面貌を知ることができる⁶⁾。

その他、名古屋大学図書館の青木(正児)文庫も画像データを一部公開しており、民国期の京劇戯単を見ることができる⁷⁾。九州大学図書館の濱(一衛)文庫にも多数の戯単が収められているが、デジタルデータの公開はされていない。一方、近年『濱文庫戯単図録：中国芝居番付コレクション』(2021)が刊行され、その全貌が明らかになった⁸⁾。

日本における戯単や演劇資料の収集には一定程度の蓄積があるものの、デジタルという視点からみると、アーカイブ化とその公開はまだ一部にとどまっているといえる。

3. 収集資料の概要とアーカイブ化

3-1. 収集資料の概要

筆者が収集してきた戲単は237件(延べ243件)で、越劇131件、滬劇65件、滑稽戯19件、甬劇6件などとなっている(整理済みのもの。その後、関西学院大学藤野真子教授の上海地域を中心とした演劇資料などを加え、演劇資料全体のアーカイブ件数は2025年7月現在で478件である)。

大きさは、縦約18cm・横約13cmのタイプと、縦約26cm・横約18cmのタイプが主流である。

戲単に掲載されている内容は、①演目名、②上演団体名、③劇場名、④演目の梗概、⑤配役一覧、⑥スタッフ一覧、⑦唱詞の抄録、⑧役者等の写真、⑨広告、⑩その他である。これらがすべて掲載されている場合もあればそうでない場合もある。稀に当日のチケットが添付されているものもある(図1参照)。



図1 長江滬劇團「沙漠情歌」(三須蔵)

年代は1950年前後以降、文化大革命期(1966-76年)を除き、その前後に亙る。一方で、年代不詳で考証が必要なものも少なくない。

3-2. 滬劇の戲単について

ここからは、特に滬劇の戲単について紹介したい。件数が最も多いのは上海市人民滬劇団(1953-1973年)の11件で、次いで勤藝滬劇団(1949-文革中?)の10件、愛華滬劇団(1951-1973年)の9件、努力滬劇団(1949-文革中?)と長江滬劇団(1952-文革中?)の5件、藝華滬劇団(1951-文革中?)と上海滬劇団(後期;1973-1982)の4件、その他、文濱劇団(1938-1951)、上藝滬劇団(1947-1952)、上海滬劇団(前期;1952-1953)、前進滬劇団(?-?)、宝山滬劇団(1978-)、長寧滬劇団(1979-)、新藝華滬劇団(1979-1982)、上海滬劇団学館(養成機関;1974-?)、上海市静安区戯曲学校(養成機関;?-?)のそれぞれ1件である。

それぞれの活動期間は基礎的な研究資料である

『上海滬劇志』⁹⁾『中国戯曲志上海巻』¹⁰⁾を基にしているが、前進滬劇団はその記載がない。しかし、上海市档案馆所蔵の「戯曲劇団班社概況調査」(1952年10月)においてその名を確認することができた。上述の上海市文化芸術档案馆の図録には2件の戲単を収録しているが(「大雷雨」(1957)、「李双双」(1959))、筆者が所蔵しているのは、図録には収録されていない「結婚進行曲」(年代不詳)である(図2参照)。

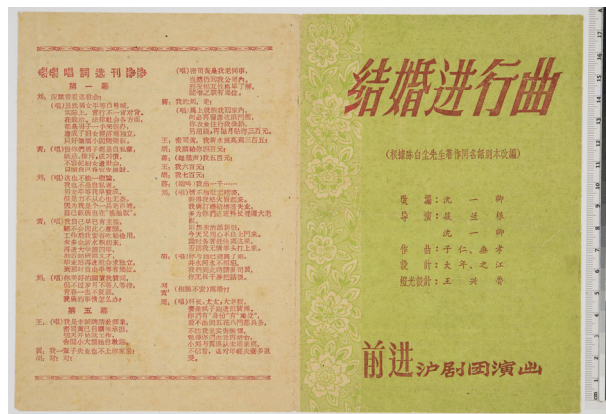


図2 前進滬劇團「結婚進行曲」(三須蔵)

档案馆の図録との関連についてももう少し補足しておきたい。たとえば長江滬劇団を例に取り上げると、筆者蔵の戲単で図録にも掲載されているものは2件(「杏林記」(1954?)、「史紅梅」(1959))、図録には掲載されていないものが3件(「沙漠情歌」(1952)、「遺腹子」(1953)、「顧鼎臣」(不詳))ある。このように、これまでの研究だけでは上演史の全貌を明らかにすることはできないということがわかる。

戲単の年代についてはじつは「不詳」が34件ともっとも多い。それを除けば1959年が11件と最も多く、あとは1948年(?)から1979年まで幅広い。1959年は、上海市文化局と中国劇協上海分会主催による上海市戯劇会演(演劇コンクール)が行われており、これらの戲単はそれに関連したものである。

3-3. アーカイブ化の経緯

収集資料のデジタル・アーカイブ化にあたっては、立命館大学文学部赤間亮教授をはじめARCの支援をいただき、既にあったARC番付ポータルデータベースの枠組みを利用して、当初は「中国演劇番付データベース 閲覧システム」を作成した。

しかし、基にしたデータベースの仕様が、日本近世演劇を想定したものであり、書誌情報(メタデータ)の枠組みのカスタマイズが必要であった。たとえば、①「上演(時期)」については「和暦」仕様になっていたため、「民国暦」と「西暦」を併用し、②「外題」は「演目(劇目)」、「よみ」は「ピンイン」、③「興行人」は「上演団体」、④「芸能分類」は「劇種」などのように適宜変更した。現在の名称は「中国演劇上演資料データベース」

である。

一方で、近代の地方劇の戲単にはスタッフとして作者や、演出、音楽の担当者が記載されており、あるいは短いエッセイ、舞台写真、役者の写真、広告などもあり、それらのメタデータをどのように組み込んでいくのかという問題は解決していない。

中国演劇に合わせた仕様に一から作り直すという方法もあったが、番付データベースの枠組みを使うことで、データを完全に分断してはいないため、将来的な連携の可能性も開かれている。現在のポータル画面の仕様はまだ改善の余地があり、なおかつ、資料ごとの「詳細書誌情報」については、番付データベースの項目がそのまま消えずに残ったままの部分もある。それらの問題は、データベースの公開とも関わるため、できる限り早期に改善を進めていきたい。

ところで、立命館アジア・日本研究機構のアジア・日本研究推進プログラムに採択された『『アジア芸術学』の創成』プロジェクトによるオンライン展示「めぐりあいアジアー芸術の移動・想像・創成」(2022)において、『秋海棠』をめぐる旅」と題した展示をおこなった¹¹⁾。一部の資料(戲単)についてはデータベースと連携させており、事実上、ごく一部ではあるが、データベースは公開されている。今後は公開の範囲を少しずつ広げていきたい。

4. 今後に向けて

エフェメラとして眠っていた戲単を、デジタルデータとしてアーカイブ化を進めることができたことは大きな前進といえる。この間、アジア圏文化資源研究開拓プロジェクト国際ワークショップ「東アジア演劇研究におけるデジタル・ヒューマニティーズの可能性」(2017年2月)を開催し、国内外の参加者と演劇研究とデジタル・ヒューマニティーズの関係性について議論することができた。この会議をきっかけに、九州大学中里見敬教授との連携を開始し、九州大学濱文庫のプロジェクトにも参画することができた。また、台湾少女歌劇の研究を進める立教大学細井尚子教授からは関連する資料のデジタル・アーカイブ化を快諾していただいた。さらに、このワークショップにも参加した国立台北芸術大学の林子竝副教授らの招きで「立命館大学 ARC の挑戦」シンポジウム(2018年11月)に参加し、交流を深めることができた。

筆者が進める演劇資料のアーカイブ化は、京劇史研究会が母体となり、筆者が研究代表者を務める科研費研究課題(基盤研究C)「中国伝統劇の「記録」と「記憶」に関する研究」(2022-2025)で継続的に作業を進め、さらなるデータの公開を目指している。中国演劇研究に少しでも貢献できるようなデータベースとなるよう、今後も鋭意努めていきたい。

[注]

- 1) <https://www.kongfz.com/index.php> (2025年7月21日閲覧確認) 2002年から運営されており、古書販売やネットオークションにも対応している。登録書店数は2万軒を越す(25年7月現在)。
- 2) 全四巻、上海文化出版社、2015年。
- 3) 全三巻、2008年。出版社は明記されていない。
- 4) [https://archive.waseda.jp/archive/subDB-top.html?arg={%22item_per_page%22:20,%22sortby%22:\[%22%22,%22ASC%22\],%22view%22:%22display-simple%22,%22subDB_id%22:%22126%22}&lang=jp](https://archive.waseda.jp/archive/subDB-top.html?arg={%22item_per_page%22:20,%22sortby%22:[%22%22,%22ASC%22],%22view%22:%22display-simple%22,%22subDB_id%22:%22126%22}&lang=jp) (2025年7月21日閲覧確認)
- 5) <https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/furyobunko/index.html> (2025年7月21日閲覧確認)
- 6) 東洋文庫のデータベース一覧ページから画像と動画にリンクしている。<https://toyobunko.or.jp/database/>。(2025年7月21日閲覧確認)
- 7) <https://da.adm.thers.ac.jp/search?collection=4&cat=891> (2025年7月21日閲覧確認)
- 8) 中里見敬・松浦恆雄編、花書院。本書掲載の松浦恆雄氏による序論「京劇戲単の変遷」は現時点における戲単研究の最新の成果と言える。筆者も解説の執筆に一部関わった。
- 9) 『上海文化芸術志』編纂委員会、『上海滬劇志』編輯委員会、汪培・陳劍雲・藍流主編、上海文化出版社、1999年。滬劇研究の基礎文献のひとつであるが、情報の偏りや漏れも少なくない。
- 10) 中国戲曲志編輯委員会、『中国戲曲志・上海卷』編輯委員会、中国 ISBN 中心出版、1996年。
- 11) <https://www.arc.ritsumei.ac.jp/lib/vm/asia/> (2025年7月21日閲覧確認)

【付記】本稿は、科研費研究課題(基盤研究C)「中国伝統劇の「記録」と「記憶」に関する研究」(2022-2025、研究代表者:三須祐介)の成果の一部である。